

雪印種苗育成・チモシー品種の 特性と利用方法

牧草飼料作物研究グループ 谷津 英樹

チモシーは極早生から晩生まで幅広い熟期の品種があり、品種によって特性や利用方法が異なります。今回は弊社が育成したチモシー品種についてご紹介します。

1. 早生品種「ホライズン」

早生品種のホライズンは平成16年から販売しており、北海道内で最も多く利用されている品種の一つです。

ホライズンの大きな特徴は1番草の倒伏に強いことと、2番草の再生力が優れる点です。2番草の再生力が優れることにより、2番草収量が高いほか、マメ科牧草との混播適性や競合力が優れます(写真1)。ホライズンはこれら特性のほか、越冬性や永続性にも優れ、草地を安定的に維持することができます。



写真1. ホライズンの2番草
※ 2番草の出穂茎が多く、再生力が優れる。
(平成26年8月21日撮影、別海町)

2. 中生品種「アルテミス」

平成26年から販売開始となった新品種です。熟期は「中生の早」であり、中生のなかでは最も出穂が早い

品種です。

アルテミスの大きな特徴はホライズンと同様に2番草の再生力が優れる点です。再生力が優れるため2番草収量が高く、再生力が旺盛なアルファルファとの混播にも適します。

写真2、3はアルファルファ(品種:ケレス)混播試験の2番草の様子です。中生の標準品種Aは再生力が緩慢なため、アルファルファが優勢に生育していますが、アルテミスは2番草の節間伸長茎(≒出穂茎)が多いため、アルファルファと同じ程度に再生しているのがわかります。



写真2. 中生の標準品種Aとケレスの混播
(雪印種苗(株)別海試験地、平成23年8月撮影)



写真3. アルテミスとケレスの混播
(雪印種苗(株)別海試験地、平成23年8月撮影)

近年、弊社育成アルファルファ品種「ケレス」のようにアルファルファの越冬性が向上したことに加え、除草剤「ハーモニー75DF水和剤」の利用が増えてきたことから、チモシーとアルファルファの混播が増えています。これまでのチモシー中生品種は再生力がやや緩慢なため、アルファルファとの混播は勧められておらず、チモシーは早生品種の利用が基本でしたが、今後、弊社ではアルファルファ混播の早刈り用としてホライズン(チモシー早生)、晩刈り用としてアルテミス(チモシー中生)を勧めていきたいと考えています。なお、気象条件が良くアルファルファが優占しやすい地域においては、オーチャードグラス「バックス」や「ホライズン」との混播をお勧めします。

3. 中生品種「ヘリオス」

アルテミスと同様に平成26年から販売開始となった新品种です。ヘリオスはこれまで当社が販売していた中生品種ホクエイとほぼ同じ出穂始であり、中生のなかで出穂始が中間に位置する「中生の中」の品種です。

近年、特に草地酪農地域ではコントラクターによる収穫が多くなりました。そのため、草地の刈取り順番は「早生品種の草地から収穫する」というよりも「コントラクターが収穫する農家順によって決まり、さらに年によって順番も変わる」という具合に同じ草地でも刈取り時期が年によって変わります。また、最近では気象が安定しないため、収穫時期も安定せず、やや刈り遅れの牧草が収穫されることが多いように感じます。

ヘリオスやアルテミスは中生であり、早生～晩生品種のなかではおおよそ中間の出穂始です。コントラクターによる収穫や気象の変動によって多少収穫が前後しても、「極端な早刈りや遅刈りにならない」利用しやすい熟期と考えています。大型機械で一気に収穫するTMRセンターでの利用にもお勧めです。

ヘリオスの特徴は越冬性、耐倒伏性、収量性、再生力など各種特性が優れることです。耐倒伏性は中生品種の中では最も優れ、再生力は中生品種の中ではアル

テミスに次いで優れます。

また、ヘリオスは採草利用のほか、兼用草地や放牧専用草地での利用にも適します。これまで放牧で利用されてきた晩生品種よりも放牧利用時の収量性が優れ、また、放牧利用時の分けつ密度の衰退も少ないため、採草・兼用・放牧とあらゆる場面での利用が可能です。なお、ホライズンなどの早生品種の場合、放牧利用では夏以降に出穂茎が多く発生し、牛の嗜好性が劣るほか、分けつ力も中生・晩生品種より劣るため、放牧利用は避けたほうが良いでしょう。



写真4. 放牧地におけるヘリオス(中央より左)とホクエイ(右)
(平成26年5月15日撮影、別海町)

※ヘリオスは越冬性が優れるため、ホクエイ(従来中生品種)よりも春の萌芽と密度が優れる。

4. 晩生品種「シリウス」

シリウスは6月末(条件が良い地域)～7月上旬(冷涼地域)にかけて出穂始となる晩生品種です。

晩生であるため、利用方法は遠隔地で遅刈りになる草地に適します。また、根釧地域などの冷涼地域では6月の気温上昇が十分でないため、乾草調製は7月以降に行われることが一般的です。7月以降に収穫する草地でホライズンなど早生品種を栽培した場合、開花期の収穫になるため(チモシーは出穂始から20日後ぐらいに開花します)、極端な収穫遅れとなり、栄養価や嗜好性が低下します。遠隔地や乾草を調製する草地など遅刈りになる草地ではシリウスを栽培し、栄養価と嗜好性の低下を防ぎましょう。